

《報告編》

第一章 長浜曳山祭の概要

第一節 長浜曳山祭の概要

第一項 歴史

長浜曳山祭は長浜市の中心市街地の東に位置する長濱八幡宮の祭礼として毎年四月一三日から一六日を中心におこなわれる。とくに子どもによって演じられる曳山狂言とそれをおこなう曳山の巡行は有名で、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

長濱八幡宮は長浜市宮前町に鎮座し、応神天皇・仲哀天皇・神功皇后の三神をまつる。延久元年（一〇六九）に石清水八幡宮を勧請したのが始まりといわれ、中世には八幡庄の産土神として崇拜される。元亀年間に消失するも、長浜城主となった羽柴秀吉により復興し、今に至る。

曳山祭の由来は、秀吉の在城当時八幡宮の祭りで太刀渡りという武者行列を始め、その後秀吉の男子出生を祝って町民に祝金を振舞い、それをもとに各町で曳山を造って祭りで渡ったことが始まりとされている。

天正十一年（一五八三）に秀吉は、長浜町に対して町屋敷年貢三〇〇石を免除する。天正十九年（一五九一）に朱印状に改められ、のちに支配する彦根藩も踏襲する。朱印地になった長浜は商工都市・宿場町・湊町として発展していく。とくに繊維業は盛んで、絹などは、

浜糸・浜絹・浜縮緬として京都などに出荷された。こうした財力をもとに曳山祭は発展していくこととなる。

一七世紀前半の曳山祭では、曳山巡行のほかに町々による練物もおこなわれた。練物とは「太刀渡り」や「大首大衣服」といった武士の格好などに仮装をして練り歩くものである。一七世紀半ばには練物は廃れ、一七世紀後半から一八世紀前半には芸能が演じられる構造の曳山が町組ごとに造られる。この時期には既に曳山で何らかの芸能が演じられていたことがわかる。曳山で狂言が演じられた初出は、寛保三年（一七四二）の猩々丸の本教（台本）と、明和六年（一七六九）以降の外題記録である。これらの記録から、曳山狂言でもにも歌舞伎を演じていたことや、作者・太夫・三味線・役者の出身地や人名などがわかる。シャギリ（囃子）の初出は寛政四年（一七九二）に編纂された『淡海木間撰』である。ここには「屋台の下にては鐘鼓・横笛を以つて俗楽をなす。土俗これを以つてしゃぎりをはやすという」とあり、曳山の巡行に際してシャギリを演奏する様子が書かれている。そして一九世紀前半に曳山の上部に亭が整っていく。亭とはシャギリを演奏する場所である。

祭礼日は明治五年（一八七二）までは八幡宮の例祭日である九月一日を本日としていたが、太陽暦の採用により一か月遅れとなる。ただし明治六年だけは明治天皇誕生日（天長節）の一月三日の翌日、四日が祭礼日となった。明治二十七年から大正二十二年は、前年の祭礼で一番山の御旅所神前入りの際に、長刀組への挨拶がなかったという問題から、太刀渡り（一〇月一日）と曳山巡行（四月一日）と分かれておこなっている。大正一三年から昭和二十四年は再び一〇月一五

日に合同でおこなわれ、昭和二五年から昭和三十一年は曳山巡行を四月一日、太刀渡りを一〇月一日におこない、昭和三十一年以降はともに四月一日におこなっている。なお、昭和一二年から昭和二十三年は戦争およびその後の混乱のため曳山の巡行をおこなっていない。昭和二十四年に、豊国神社の豊公三五〇年奉賛行事で曳山狂言の執行がおこなわれ、翌昭和二五年から本格的に曳山祭は再開している。

第二項 行事内容

現在、曳山祭では一三の山組が曳山を曳行している。そのうち長刀組を除く一二の山組が曳山で狂言を執行する。長刀組は毎年曳山の曳行と太刀渡りをおこなうが、ほかの一二の山組は三年に一度のみ曳山を曳行し狂言を執行している。狂言をおこなう山組は出番山、それ以外は暇番山とよばれる。出番山の組み合わせは①春日山（本町組）・月宮殿（田町組）・青海山（北町組）・諫鼓山（御堂前組）、②鳳凰山（祝町組）・高砂山（宮町組）・猩々丸（船町組）・壽山（大手町組）、③翁山（伊部町組）・常磐山（呉服町組）・萬歳樓（瀬田町組）・孔雀山（神戸町組）である。なお、山組が財政難などの理由により狂言を執行できないこともある。

囃子はシャギリとよばれ、曳山巡行、狂言の始めと終わり、裸参りや籤取り式など祭りの各場面で演奏される。シャギリは出番山の山組だけでなく、暇番山の山組も応援に行くなどして参加している。

長浜曳山祭の準備は前年の十一月一日に八幡宮の参集殿でおこなわれる山組集会（初集会）から本格的に始まる。ここでは出番となる山組の出場意向の確認をする。翌年二月一日に八幡宮の参集殿で開催される山組集会で出番の正式決定および外題などの発表がおこなわれる。

一方、各山組においても一月から若い衆・中老・祭典委員会などが寄合いを重ねる。

狂言の準備として、まず一月下旬から二月上旬に各山組は役者依頼をおこない、役者となる子どもが決まる。その後二月上旬に配役を決める役者決め、二月上旬から中旬に衣装・鬘合わせ、三月中旬に稽古場の設営をおこない、三月二〇日頃から祭り前日まで狂言の稽古をおこなう。

シャギリの練習は、各山組で一年中おこなわれる。

長浜曳山祭の行事は次のとおりである。

- 四月九日～一二日 線香番（九日）・裸参り
- 四月一三日 起し太鼓・御幣迎え・神輿渡御・籤取り式・十三日 番（自町狂言）
- 四月一四日 狂言執行（自町狂言）・登り山・役者夕渡り
- 四月一五日 起し太鼓・春季例大祭・役者朝渡り・長刀組太刀渡り・長刀組翁招き・狂言執行・神輿還御・戻り山
- 四月一六日 後宴狂言執行（自町狂言）・観劇会
- 四月一七日 御幣返し

なお、平成一三年からは、四月の第一土曜日に長浜市曳山博物館において曳山交替式がおこなわれる。曳山博物館では出番山の四基が収納展示されており、曳山交替式で博物館から曳き出され、各山組の山蔵まで巡行される。そして、次年度の曳山四基が収納される。

第二節 長浜曳山祭の組織

長浜曳山祭を執行および保存伝承する組織は、總當番や山組といった近世以来の伝統的な組織と、それ以外の長浜曳山文化協会や長浜曳山祭囃子保存会といった戦後に設立した組織に大別できる。現在、伝統的な組織と戦後に設立された組織は密接に関係しながら長浜曳山祭の伝承・発展を図っている。以下で各組織を概観していく。

第一項 伝統的な組織

近世を由来とする伝統的な組織として總當番と山組がある。この二つが曳山祭の執行の中心となる組織である。總當番は曳山祭を統括する組織で、山組は曳山の保守管理、曳山狂言の執行、そしてシャギリなどの伝承母体でもある。

(1) 總當番

長浜曳山祭に関する行事および事務を統括する機関である。總當番の構成は当番に当たった二つの山組から三人ずつの計六人と、氏子総代・長刀組・四つの出番山組・七郷（江戸時代の長浜町の周辺にあった列見村・八幡中山村・八幡東村・三津屋村・南高田村・北高田村・宮村・瀬田村の区域を指す）からそれぞれ選ばれた七人が加わり、合計一三人体制である。

役割は、委員長・副委員長・会計・渉外・記録・広報・神事・賄い事・警備などである。

(2) 山組

長浜曳山祭の長刀組と曳山狂言を担う一二の山組は、曳山祭が成立・発展した江戸時代の長浜五二か町に基盤を置き、その一か町ないし六か町で一つの山の組合、つまり「山組」を構成している。太刀渡りをおこなう長刀組や曳山狂言をする山組は若い衆と、若い衆を終えた中老とで祭りがおこなわれる。

曳山狂言にかかる行事や役割を担う若い衆と曳山やその曳行・警備、祭礼の進行などを担う中老からなり、若い衆の代表を筆頭といい、中老の代表を負担人という。各山組全体の代表は負担人が務めている。

山組では、主となって祭りを執行する負担人や筆頭などの役員選出について、山組を構成する町が輪番制で当たる当番町制度を採っているところと、当番町制度をやめて山組全体が一つとなって選出するところの二つに分けられる。また、狂言執行についても従来どおり若い衆がすべてを担う「若い衆祭り」のところと、若い衆と中老が一緒になって担う「総祭り（全町祭り）」の二つに分類される。近年「若い衆祭り」から「総祭り」へ移行する山組がある。いずれの場合も山組の構成人員の不足、携われる時間の制限、資金の負担増などの理由からの変化である。

山組の構成人員も、従来なら山組の町内に居住するものであったのが、高度経済成長による社会の変化に伴ってか、次第に若い人や若夫婦が山組内から出て居を構えたり、遠方へ就職したりして若い衆の減少などが生じている。このため、山組内の町に居住する者のほか、親などが山組内にいて山組外に居住している者、山組内に店舗があり山

組外に居住している者、借り役者や囃子方の子どもが成長して参加する者や役者親、全く関係ないが、曳山祭が好きで参加を申し込む者など様々な人たちが構成員に連なっている。

また、山組の出番山に伴う祭りに必要な資金は、およそ七、八〇〇万円だが、山組各町の積立金のほか、長浜市や滋賀県からの補助金・曳山祭協賛会からの助成金によって賄われている。

各山組の状況は、聞き取り項目や内容の精粗はあるが、およそ次のとおりである。また、二三年度出番山組を中心に見ていく。なお、若い衆は、若キ中（ワカキチュウ）・若キ者（ワカキモノ）・若連中（ワカレンチュウ）・若衆（ワカシユウ・ワカイシユウ）・奇合（キゴウ）と山組によって名称が異なるが、ここでは若い衆と表記する。

【春日山（本町組）】

自治会と山組 春日山は西本町・東本町・横町の三つからなる。戸数は西本町が多くて約二〇軒、横町は一三軒、東本町が約一〇軒である。自治会も三つに分かれている。もともと戸数が少ないうえ近年はさらに減少している。現在は山組の役からは東本町が抜けていて、実質的には横町と西本町で運営している。

山組総集会 出番山までに運営し、一回山組総集会が開かれる。これは町内のものは一軒から一人必ず出なければならぬこととなっている。若い衆や中老に入っているかどうかは関係がない。

負担人 負担人は現在は東本町は出しておらず、西本町と横町から出た人が年度ごとに正副を交代している。それぞれの人选は各町内で決めているが、同じ人が長期にわたり務める傾向にある。

町ごとの担当・負担 負担人だけではなく筆頭や御幣使なども二つの町で交代に出すことになっているが、現在では人数が少なくなってきたので必ずしもそうっていない。費用負担は両方の町で戸数は異なるが均等になっている。

若い衆の年齢 若い衆に入る年齢はとくに決まっていないが、大学を卒業してから入る場合が多い。現在はあまり高校を卒業してすぐ入る例はない。若い衆を出るのは四五歳で出番山を終えてからなので、人によっては四六歳や四七歳の場合もある。祭りのあとに打ち上げの宴会があつてそれで若い衆を終える。最近はそのときに時計などの記念品を贈るようになった。若い衆入りの儀礼はとくにはない。また前髪の制度もない。

若い衆のメンバー 若い衆は平成二三年の祭りのときには二五人在籍していた。そのうち町内に居住しているのは五人だけである。元々町内に住んでいた人や、町内の人の血縁者・役者親・シャギリをする子の親なども加入している。店を町内で経営しているが住所は別という人もいる。また若い衆は一軒から二人出ることもある。

筆頭 若い衆の役職は筆頭一人と副筆頭二人である。副筆頭の一人は総務担当で賄いや会計などをする。いま一人が演芸担当で役者や三役の担当をする。筆頭になる年齢は四五歳ぎりぎりよりも、出番一回を残してすることが多い。筆頭を退くと若い衆の相談役になり、次回の出番山ときには相談にのる。したがって筆頭が必ずしも若い衆の最年長者だというわけでもない。今のところ筆頭については町内の人から選ばれている。

中老 若い衆を出ると中老に入るが、これは終生抜けることはない。

中老は一軒の家から二人出ることではなく、息子が入ると親は抜けるわけではないが行かなくなる。若い衆は個人が単位だが、中老は家が単位だという意識がある。

春日会館 春日会館は三つの自治会で建てた。老人会や子ども会など祭り以外にも使っている。できたのは平成一五年でそれ以前には会館はなかった。もともとその場所に旅館があったが、空いていたのでその二階で狂言の練習をしていた。それ以前は空き家を探して狂言やシャギリの練習をしていた。開智学校の二階や筆頭宿（筆頭の家のこと）でしたこともある。

【月宮殿（田町組）】

構成 南新町・上田町・中田町・下田町の四町で構成されている。約一〇〇世帯と山組のなかでも有数の大きな山組である。山組は四町を統括する機能を持ち、コミュニティの中核組織となっている。

組織 組織は年齢によって分けられる。元老は七一歳以上、中老は四六歳から七〇歳、若い衆（若キ中ともよばれる）は一六歳から四五歳、前髪は一五歳以下である。

役員 次の役員を置く。負担人一人・副負担人一人・總當番若干人・保全委員一人・祭典委員四人・運営委員若干名。以上は中老が当たる。そして、若い衆筆頭一人がある。ただし出番山の年は必要に応じほかの役員を置く。

負担人 中老の代表者である。山組を代表し、一切の業務を統括する。かつては同じ人が長きにわたり務める傾向にあったが、現在は交代制で務めている。

副負担人 負担人を補佐し、山組の会計処理をおこない、負担人に事故があるときは、業務の代行をする。

總當番 山組を代表して總當番に出仕し、長浜曳山祭、全山組の運営に務める。

文化財保全委員 曳山および付属物の有形文化財としての価値を維持するため、修繕、新調の必要性を調査検討し、関係官庁、学識経験者などと協議をおこない、最善の方法で保全につとめる。

祭典委員 四町から各一人選出される。祭礼儀式の適任者が長浜曳山祭の円滑な執行のため、負担人に協力する。

運営委員 各町から若干名を選出し祭礼または曳山に関する諸行事の運営に当たる。自治会長が当たる。

若い衆筆頭 若い衆が自主的に選出した責任者で、若い衆および前髪を統括し、主に狂言の執行を担当する。

役員の選出方法と任期 役員は総会で選出し、任期は一期三年を原則として再選は妨げない。ただし、六年に一度の總當番を担当するときはこの限りではない。祭典委員の選出は負担人の推薦による。

若い衆と中老の担当 若い衆祭りの形態を採るが、若い衆が狂言の執行を担当し、曳山に関する事務や狂言に用いる舞台装置・大道具・小道具の準備なども担当する。中老の人数が高齢化により減少し、運営が困難な状況なため、これまでは二町ずつ祭りに参加していたが平成二三年から全町で参加することになった。

前髪 昭和三七、八年に当時の若い衆が、祭りを継承するために子どもから養成することが必要だと考え始めて、子どもの組織を作ったのが前髪である。月宮殿・萬歳樓など南部の山組はそうした継承へ

の意識が高かった。

記録の取り組み 曲の楽譜化（三味線の譜で）をするなど、もともと口承が基本だった祭りの記録化が盛んである。昭和三〇年代に記録した八ミリ映像もある。

毎回、出番山のとときの記録をパソコンで作成し、毛筆で記録帳を作って引き継ぎに使っている。また月宮殿の祭典規約もある。

祭り以外の山組の活動 昔は山組単位でハイキングに行ったり、防災活動をしたりした。

予算の出所 山組に所属する九六軒からの寄付および、長浜市や滋賀県からの補助金、曳山協賛会からの助成金で祭りに関する資金を賄っている。なお寄付する家が平成二〇年に比べ九戸減少しているため、寄付金が減少している。

出田町有志の祭りへの協力 若い衆の出田町（田町出身だが現在は田町の外に在住の人のことを指す）の有志が、筆頭をつうじて会計に寄付した。

【青海山（北町組）】

構成 郡上町・郡上片原町・中北町・東北町・鍛冶屋町・袋町の六町で構成されている。以前は知善院町も入っていたが、昭和三八年に脱退している。

祭運営組織の変遷 昭和三八年以前は若い衆祭り、若い衆だけで祭りの準備をしていたが、昭和四〇年代以降は組祭りになった。各町が輪番制で祭りを担当し、当番町の若い衆と中老が実行した。しかし一町ごとでの祭りの執行が難しくなり、当時の若い衆が中心と

なつて、平成五年以降、青海山は総祭りへと変えた。

また、平成五年から次の出番までの三年間で、若い衆の改革をおこなった。マニュアルを作り、若い衆から会費を徴収し、揃いのハッピをつくった。それまでは紋付だけだった。現在は中老のマニュアルを整備しているところである。

若い衆の組織 若衆（ワカישユウとも呼称される）。だいたい一五歳以上から任意で加入できる。多くは高校や大学を卒業してから加入する。加入の儀礼などはない。基本的に自町に住んでいる者が加入するが、なんらかの縁があれば他町在住の者でも加入できる。

出番山が終了してから約一週間後に若い衆の後宴が催され、三年後の出番山までに四八歳に達する者はこの日に引退する。引退後、必ずしも中老になるわけではない。若い衆だけで辞める人もいる。かつては、若い衆に入るのは中学生くらいからで、その前の小学校六年は一年間デッチコゾウを務めた。

若い衆筆頭と筆頭心得 筆頭心得は次期筆頭である。出番山の祭り後におこなわれる後宴のときに、筆頭心得は新筆頭になる。そして新筆頭は新しい筆頭心得を指名する。筆頭心得は、町内の人々の意見を参考にしながら最終的に筆頭が決める。

若い衆副筆頭 後宴から次の出番まで四人が担当する。出番において重要な役割を担う。平成二三年の祭りで副筆頭に当てられた役は囃子部長・綱先・役者係総括である。囃子部長は青海山におけるシャギリにかかわる事項の責任者で囃子部を率いる。綱先は曳山の運行に関する責任者である。後方や曳行のための若い衆とボランティアを統括する。役者係総括は役者の子どもたちに関する責任者で役者

係と役者親を統括する。

かつての山組への加入 かつて、山組を構成する町内に引越してきた家はアゲトウという上納金を支払って山組へ加入した。

【諫鼓山（御堂前組）】

構成 西御堂前町・東御堂前町・十軒町という江戸時代からの町で構成されている。自治会としては御堂前町と十軒町の範囲である。

社団法人化 全山組のなかで初めて法人化をおこない、平成二年八月一日に一般社団法人御堂前組諫鼓山となった。従前からの祭りをおこなう組織はかえないで、曳山や山蔵の所有者の法人名義化と構成員の山組地域外への拡大を図っておこなわれた。

組織 祭りでは中老と若い衆に分かれるが、中老から選出される負担人が山組を代表する。法人としては代表理事が代表し、さらに理事・監事が選ばれる。法人の役員会は理事会となっている。

祭りの執行形態 若い衆祭りの形式を採っている。曳山狂言以外の行事執行は中老が担当し、狂言の執行は若い衆が担当している。狂言の執行については若い衆筆頭の意向が強く反映される。

中老 若い衆を卒業したら中老へ入るが、入らない人もいる。祭りには三町の中老から選ばれた祭典委員が合計二五人いて、祭礼行事の全般を取り仕切る。出番山のときは山飾り・曳山の警固・裸参りの警固・アトヤマ（後山）の組み立て・稽古場の管理などの仕事の分担を決める。このほか、出番山の年にかかわらず曳山の保存をする役も設けている。負担人は前負担人の指名による。

若い衆 若連中（ワカレンチュウ）ともいう。若い衆は二五人在籍

している。高校を卒業して、長浜近辺で働いていたら若い衆に加入できる。しかし若い衆は積立金を払わなければならない、大学生は基本的に払わせるわけにはいかないのが大学生は入れない。現在、町内在住の若い衆は七人いる。ほかは町内に親の家や、経営する店があり、町外に家建てて住んだりしている。また、借り役者の親のなかには若い衆の友人などもいる。四五歳で若い衆を卒業する。

筆頭の選定 祭りが終わると筆頭は次の筆頭を指名する。

副筆頭の人事 例年副筆頭は一人だが、平成二三年の祭りでは三人だった。一人は筆頭より年上の四〇代だが、あと二人は三〇代半ば。三〇代の副筆頭のうちどちらかが次の筆頭になる。

町外出身者 若い衆で町内出身者と血縁関係がない町外出身者は次のように分類できる。①町内に引越してきた人、②小さい頃に山組の子に誘われシャギリを習い、その縁で若い衆に加入した人、③町内に店を出して若い衆に加入する人、④子どもが借り役者（町外の子による役者）に頼まれたのが縁で若い衆になった人。若い衆の仕事の関係者や友人の子に借り役者を頼む場合が多い、⑤若い衆の友人、⑥町内出身の女性と結婚した人。また、諫鼓山では約二〇年前に若い衆を公募し、三人が加入したことがある。

財源 祭り費用の財源には町内の祭礼伝承費の積み立てと行政や協賛会からの助成金、それ以外にパンフレットの広告収入があるが、不況時は厳しい。そこで約一〇年前から若い衆が積立金を毎月払っている。

【高砂山（宮町組）】

構成 宮町・片町・金屋町・金屋新町（錦南）の四町で構成されている。

当番町 四町で暇番山当番と出番山当番を逆周りでまわしている。

祭典委員は、出番山の年は一人、暇番山の年は一〇人で、当番町以外の町から各二人選ばれる。当番町が正負担人、次の出番町である受当番町が副負担人を出す。暇番山当番では御幣宿の当番、曳山の虫干しなどをする。出番山当番の町から筆頭と負担人を選出していた。また、二〇年くらい前の修理をきっかけに、曳山の保存会を自治会長と各町から最低一人選出された祭典委員で組織している。最近では合同委員会を開き、四町一緒に寄り合いをしている。

各町の費用分担 祭りの費用のうち、助成金を除いた山組が負担する分は、各町の戸数によって割り当てられる。

若い衆 正式には若キ者（ワカキノ）、普段は若い衆という。若い衆が中老から費用を受け取り、祭りを執行する。かつては中学生でも家に住んでいた若い衆に加入した。若い衆の卒業は昭和四八年までは数えて三五歳だったが、その後は四〇歳になり、現在はさらに年齢が上がっている。

若い衆の役割 筆頭は綱先取締りとして曳山の指揮を執る。ほかに三役方・舞台取締り（舞台方）・提灯方・賄い方などがある。若い衆は、役者方・三役方・そして筆頭と、年齢が上がるに従って役割がかわる。ほかに、シャギリを指導する囃子方がある。

中老の役割 中老には祭典委員がある。それ以外は、当番が当たらない限り、あまりすることはない。当番に当たると山曳きや曳山の

掃除に行く。中老にも綱先取締りという役があり、山曳きを指揮する。

中老のほかの役には、賄い方・警備方・曳き方などがある。

会館 宮町会館がある現在は会館というが、昔は町家（チョウイエ）といった。

【壽山（大手町組）】

構成 大手町と大谷市場町の二町で構成される。壽山は大手門通商店街に位置している。昔は商店の店主たちだけで担っていたが、現在は町内にゆかりのある人も若い衆に入れ運営している。

若い衆 壽山の若い衆は現在約一七人である。若い衆のなかで一番年下が三〇歳で、次の世代を担う二〇代の若い衆が少ない。原因として都会から若者が戻ってこないことが挙げられる。

外部からの若い衆の参加 現在は若い衆が少ないため、まちづくり役場や店を借りる人に若い衆に入ってもらっている。また、どうしても山組に入りたくて許可をもらって入れてもらう人もいる。

外部から若い衆に入ってもらっている人はシャギリはできないので、役者方を担当する。

祭りの運営方法 若い衆祭りとして、若い衆が中心になって祭りをおこなっている。シャギリと狂言は若い衆が担当し、中老は曳山を担当する。祭りの運営については必要最低限のことだけ決めておき、それぞれの解釈を競い合わせるなかで、社会の変化に応じて祭りの根幹はかえずに執行している。

ボランティアへの拒否感 ボランティアの受け入れについては、出番山組のようなピリピリしているところで、みんな会社を休んで来

て必死なのに、中途半端な気持ちでボランティアに入ってきてもらっては、団結力が一気に崩れてしまうと危惧している。

【猩々丸（船町組）】

構成 上船町・中船町・下船町・稲荷町・十一町の五町からなっている。
若い衆 現在二〇人ほどである。高校生から若い衆入りするが、多くの場合は高校卒業後となっている。若い衆の卒業は四五歳であるが、その時点で出番山でないときは次の出番まで若い衆を務めることになっている。

役割 若い衆筆頭を中心にして、副筆頭・若い衆の会計をする賄い方などの職があり、出番山のときには若い衆それぞれが、役者担当の役者方や狂言の道具方などの役に就き、狂言の練習を始め、狂言上演の一切を取り仕切る。近年はシャギリについても、若い衆が中心になって後継者の育成や祭りでのシャギリ運営を担当している。

また、以前は若衆筆頭といわずに頭若衆という名称を使用していた。現在はほかの町に合わせて若衆筆頭となった。

さらに、山曳きについては、月宮殿、萬歳樓の若い衆と提携し、出番山の山曳きを暇番山の町から応援する体制をとっている。

中老 若い衆卒業後は中老となる。中老は曳山の管理や祭りの執行を務める。五町の中老から各町二、三人祭典委員が選ばれ、祭典委員会を組織している。祭典委員の中心が負担人であり、負担人は猩々丸の代表者であり責任者でもある。そして、負担人の補佐として、副負担人・賄方（会計）が置かれる。出番山のときは人事・警備・綱先などの職務も決められ祭りを執行する。

祭りの執行形態 祭りの執行は、以前は若い衆であったが、現在は若い衆・中老一緒になって進めていく総祭りとしている。しかし、若い衆は狂言を中心におこない、中老は祭りの執行全体をとりおこなうという役割分担をしている。

【鳳凰山（祝町組・魚屋町組）】

構成 東祝町・中祝町・西祝町で構成される。江戸時代は東魚屋町・中魚屋町・西魚屋町といった。

若い衆 四五歳までが若い衆である。社会人になったら入る。大学生が入ってはいけないということはないが、大半は社会人になってから入る。役者を経験し、若い衆になるのが一般的だが、そうでないこともある。四五歳を超えて一回祭りをするか、そのまま中老になるか選択ができる。

若い衆が集まる機会は祭りだけである。若い衆に入るときは初寄りに出て、挨拶、紹介があり、その後、どこかに飲みに行く。卒業のときは、初寄りか、出番山の年なら祭りの終わったあとの若い衆後宴で挨拶する。

筆頭は町内の関係者になる。町の外部の人が筆頭になることはまだないし、そこまでは人材的に困っていない。よそから移住してきても町に住んでいれば町の人として筆頭になれる。

中老 中老入りのときは、初寄りで負担人から紹介される。中老の卒業は亡くなったときとされ、死ぬまで祭りに参加するべきだとされていたが、四年くらい前から七〇歳以上は大老として、体力的精神的に難しい場合は参加しなくてもよいことにした。

祭りの執行形態 若い衆と中老で祭りをする総祭りである。シャギリと芝居は若い衆が担当し、中老は曳山を担当する。若い衆と中老が一緒にお金を集める。昔は若い衆祭りだった。

財源 祭りのお金がかかり、負担が大きい。行政からの補助もあるが、大半は自分たちで賄う。前回の出番山のときはパンフレットの広告料で全費用の半分近くを集めた。修理費などにも充てる。広告料をもらう企業は主に地元の企業で東京など外部資本の企業にはあまり頼みにいかない。

【翁山（伊部町組）】

構成 江戸時代からの南伊部町・北伊部町・三ツ矢（三津屋）町・三ツ矢村で構成される。明治期までは北出町も加入していた。通常、南伊部町と北伊部町を合わせて伊部町または南組といい、北出町・三ツ矢町・三ツ矢村又は北組という。自治会としては伊部町自治会と三ツ矢南自治会に分かれている。

祭り執行形態 若い衆祭りの形態を採る。中老が曳山を担当し、若い衆が狂言の執行を担当する。狂言に中老は口出しをしないことになっている。中老が稽古場に顔を出すことも全くない。しかし、だんだんと総祭りにかわってきつつある。

当番町制 約三〇年前まで伊部町が三回に三ツ矢町が一回という割り合いで執行していたが、経済的に町ごとでの負担が難しくなり、二町と一緒に祭りを執行するようになった。

若い衆 奇合（キゴウ）ともよぶ。四五歳以上で本番を迎えたら若い衆を退く。しかし、平成二三年の出番山のときに四五歳になった

人が四、五人おり、人員不足のため残ってもらった。在席人数は、名簿上一八人だが、実際に来るのは一〇数人。非常に少ない。若い衆に入っていないが手伝ってくれる人が二四、五人いる。彼らをほかの行事のときにも声かけをし、出番のない二年間も時々呼び顔つなぎをする。借り役者の父親に若い衆入りしてもらうこともある。若い衆は、普段はあまり話さないが、祭りのときはよく話す。外題決めは大変だが楽しい。なんともいえない達成感がある。祭りでの盛り上がり商店街の活気につながれたらいい。

予算の仕組 三ツ矢町と伊部町は今でも別々に祭典費を集めている。三ツ矢町は自治会費と祭典費を別々に徴収する。伊部町は祭典費が自治会費に内包して徴収する。そしてそれぞれ集めた祭典費を合わせる。だからいまでも会計だけは町ごとに役職をおいている。祭典費は家によって金額が違う。老人だけの家などは安い。

【常磐山（呉服町組）】

構成 上呉服町・中呉服町・下呉服町・南片原町・西北町の五町で構成されている。

組織 四五歳以下の若い衆と、六五歳以下の中老が祭りの運営に携わる。なおこの上に六五歳から七五歳の大老と、それ以上の元老があるが運営にかかわらない。今までにやってきたことをかえるときには、中老に伺いを立てて、話し合いをおこなって決める。中老と若い衆を合わせて六〇〜七〇人程度。ただし実働は三〇人程度。若い衆と大老の接点は総寄りのときくらいである。

若い衆 筆頭の下に複数の副筆頭と囃子方を置く。副筆頭のうち一

人は若い衆の会計を兼務する。また囃子方の下には囃子方の会計を一人置く。暇番山の年の役職は以上だが、出番山の年は祭りの半年前になると、役者方・三役係・照明・衣装・音響・大道具・小道具・賄いを決める。またパンフレットの編集も若い衆が担当する。

当番町制 四つの町が順番に当番となる当番町制で、原則として、筆頭や籤取人は当番町から出る。前回は中の町(中呉服町)が当番だったものの、若い衆がゼロだったため、ほかの町から人集めをした。

祭執行形態 昭和四六年に若い衆祭りから総祭りに移行した。

中老の担当 山曳きの管轄は中老。曳山の維持・神事・予算を主に担当している。

職業の変化による祭り運営の問題 昔は自分で商売をしている人が多かったので、祭りのときは店を閉めることもあった。今は大半がサラリーマンなので、交代で役に当たっている。長浜の昔ながらの会社なら祭りに対して理解があり休めることもあるが、勤務先が遠方だと休むことが難しい。

町外からの祭り参加 若い衆が少なくなっているので、町外からの若い衆の加入も認めている。領域的には長浜市全体から来ている。前回から、若い衆の友人で山曳き・裸参りで祭りにかかわるようになった人のなかで、長年貢献した人に若い衆になってもらうようになった。現在、どの部分の門戸を広げていくかが課題になっている。

平成二一年の出番山の際には駐車場経営や空き店舗の活用をおこなうまちづくり会社の、商工会議所出身の人と市役所の人がフル出場状態で手伝っていた。

祭りの資金調達 資金繰りは助成金や町費で賄い、パンフレットに載

せるスポンサーからの協賛金は曳山の修繕費用として使われている。

【孔雀山（神戸町組）】

構成 神戸町で構成される。一町のみで構成する唯一の山組である。

人数 孔雀山は一町で山組を形成しているため、戸数が二三軒と少ない。その内男性を出せる家はさらに少なく一八軒のみである。昔は本店があつて番頭さんや使用人などが多くいたため、一町で祭りを執行することができた。現在若い衆が約七人で、中老も約七人である。若い衆には年齢の上限はなく、五〇歳でも若い衆をする。籤取人はほかの山組で未婚者がするが、孔雀山は既婚者でもある。また、中老は亡くなるまで中老をする。人数が少ないため総祭り方式を採る。

【萬歳樓（瀬田町組）】

構成 瀬田町・八幡町・横浜町・箕浦町・大安寺町・紺屋町で構成される。六町は八幡町、瀬田町・横浜町・箕浦町、大安寺町・紺屋町の三組に分かれ、三つの組の中老から祭典委員が九人ずつ二十七人選ばれる。負担人は三組の輪番制となっている。筆頭も負担人と同じ組から出る。シャギリや狂言の稽古は八幡町会館でおこなう。

若い衆 昔は一〇〇人くらいいたが、今は四〇人くらい。萬歳樓の若い衆にはよそ出身の人が少ない。今でも半分は町内に住んでいる。

昔は町から出た人は役員にできなかったが、現在は町内在住者だけで役員をまわすのは難しくなっている。

若い衆見習い 高校生は若い衆の見習いをする。

祭りの執行形態 狂言にかかわる仕事を若い衆がすべて仕切っている。若い衆祭りの形態を採っている。

第二項 祭りを支える様々な人々と組織

ここでは戦後設立された祭りを支える伝統的な組織などとは違って、長浜曳山祭の保存・伝承・普及を目的に戦後に設立された組織および、近年の山組間で見られる相互協力関係、そしてボランティアを概観する。

(1) 長浜曳山文化協会

昭和五四年に国指定重要無形民俗文化財の指定に合わせて設立された長浜曳山祭保存会を前身とする組織である。現在は長浜市曳山博物館に事務局を置いている。長浜曳山祭の普及・伝承・活用を目的とし、現在長浜市曳山博物館の運営・三役修業塾の運営・子ども歌舞伎教室の開催・曳山の修理・曳山祭の保存などの業務をおこなう。

(2) 伝承委員会

長浜曳山文化協会の下部組織の一つで、三役修業塾の運営や子ども歌舞伎教室など主に曳山狂言の伝承・執行に大きな役割を果たしている。なお、長浜曳山文化協会および伝承委員会については論考編「人材育成・芸能継承のための組織」で詳しく説明する。

(3) 三役修業塾

三役、とくに太夫・三味線の育成をするために平成二年に設立された組織である。曳山狂言は振付・太夫・三味線の三役を専門家に依頼して執行してきたが、昭和後期から人材不足により曳山祭の執行に支障をきたす恐れが出ていた。そこで地元長浜で三役を育成し始めたの

である。現在塾生は長浜曳山祭だけでなく、滋賀県米原市や岐阜県垂井町などの子ども歌舞伎にも出演している。なお、三役修業塾については詳細を第二章で説明する。

(4) 長浜曳山祭囃子保存会

昭和四六年に発足した曳山祭のシャギリの普及・伝承をおこなう組織である。また、祭りの際は出番山組への囃子方の応援を調整する役割も持つ。長浜市曳山文化協会およびその前身となる長浜曳山祭保存会とは独立した組織である。なお、囃子保存会については、第三章で詳しく説明する。

(5) 若衆会

平成九年一月に狂言をおこなう一二の山組の若い衆で結成した。当初は学習会と懇親会をしていたが、次第に懇親会のみがおこなわれるようになる。平成二三年二月に改めて筆頭・副筆頭が集まり、今後のあり方を考える会議が開かれる。平成二二年の滋賀大生の山曳きアルバイトがキャンセルになったことを踏まえ、一二の山組が協力してはどうかなどが議論されている。

(6) 山組の相互協力

山組の相互協力は山曳きやシャギリ場で見られる。山曳きは近年人手不足が深刻化したため、複数の山組が協力し合い、人手を融通し合うようになっていく。背景にはボランティアの不足だけでなく、山曳きを指揮指導するだけの人数の余裕が山組になくなっていくことも原因として挙げられる。また、平成二三年三月に発生し

た東日本大震災により今津駐屯地の自衛隊の応援がなくなったことも、山組の連合を加速させる契機となっている。

現在山組の協力関係は、萬歳樓・猩々丸・月宮殿の三山連合と諫鼓山・翁山・鳳凰山のグループ、そして前述した若衆会が主なものである。

三山連合 平成七年の阪神・淡路大震災で自衛隊に一部しか出てもらえなくなったため、萬歳樓・猩々丸・月宮殿のうち、出番山だった萬歳樓に、暇番山の猩々丸と月宮殿が人手を出すようになった。これが三山連合の始まりで、その後も協力が続いている。山曳き以外にも裸参りの応援もするようになった。

この三つの山組は名前に「山」がつかず、米川より南にあるので川南や南三山とも呼び、雰囲気は北部の山組と少し違う。川南の雰囲気は荒けないといわれる。シャギリの曲も囃子保存会の曲と違う。

諫鼓山・鳳凰山・翁山グループ 平成二三年からは山曳き経費節約のためなどから諫鼓山・翁山・鳳凰山の負担人の協議により登り山と祭り本日で互いに山曳きの協力することになった。東日本大震災が起こる前から、協力しておこなうことを決めていた。曳山交替式での相互協力があったので、スムーズに話しがまとまった。また暇番山も祭りをしたいという気持ちの後押しした。

曳山交替式での山曳きの協力は平成一七年からおこなっている。三町の負担人で話し合って、若い衆が協力することになった。負担人間で話をつけ、あとのことは筆頭に任せて、とくに挨拶はいらないということにしたが、実際は扇子を持って挨拶はおこなったし、曳いてもらったら、その日に缶ビールを配った。

諫鼓山・翁山・鳳凰山は昭和四〇年代後半から平成一〇年頃にか

けて振付を中村芝蝶氏にしてもらっていて、以前からつながりがあった。起し太鼓のとき、宿に行つて交流したりしていた。

曳山交替式での協力 平成一二年一〇月の曳山博物館の開館に伴って、毎年四月第一土曜日に四基ずつ展示する曳山の交替がおこなわれるようになった。このときの山曳きは自町でおこなうことになっているが、各山組は人手不足のため、これまでほかの山組や若衆会などの協力を得てきた。曳山交替式での協力関係が祭り本番での協力関係につながっている。

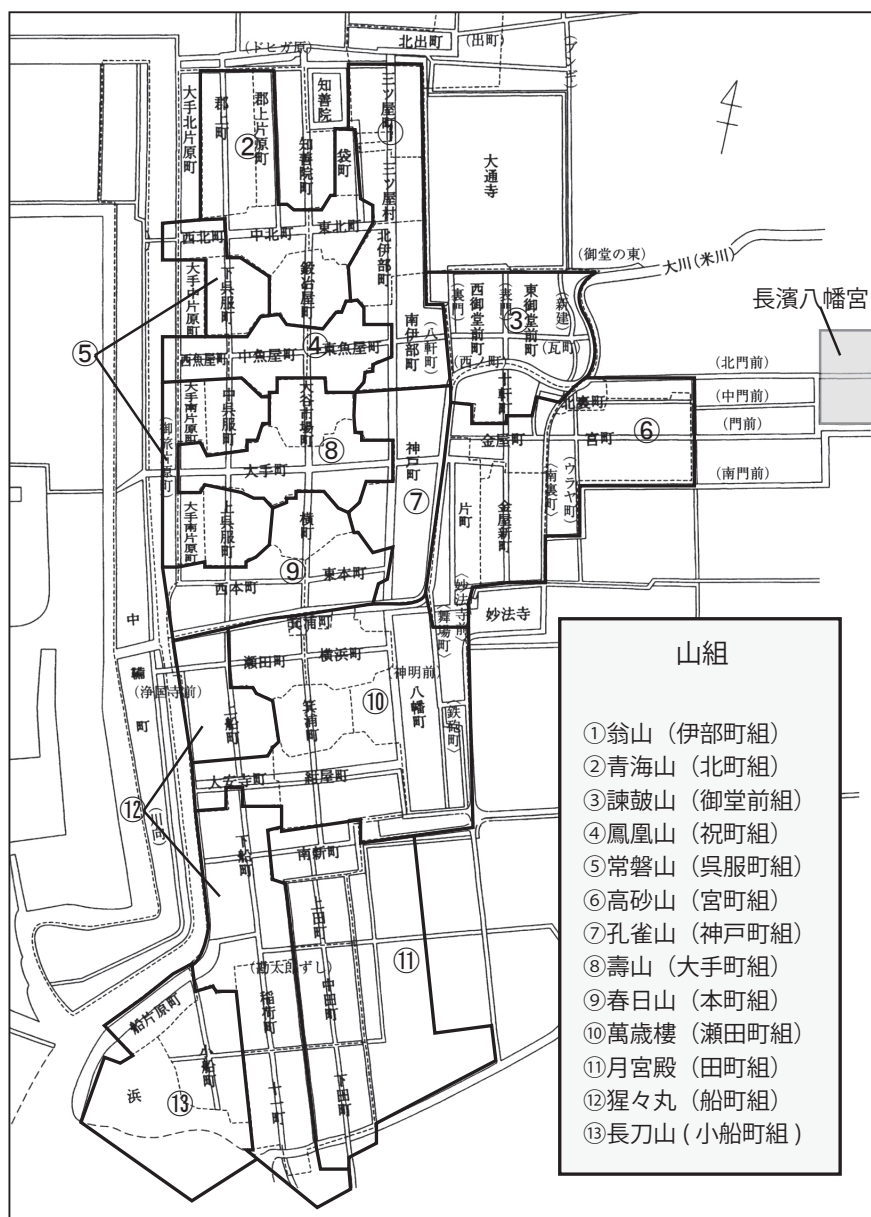
シャギリの相互協力 出番山は狂言の執行に男子や若い衆の人手がさかれるため、囃子方が不足しがちである。そこで囃子保存会が調整したり、山組独自に調整して暇番山から囃子方の応援を得ている。

そのほかの関係 若い衆の間では起し太鼓の際に、ほかの山組に激励に行ったりする。また裸参りのときは、沿道で応援したり迎えシャギリをしたりする。

(7) ボランティア

ボランティア 昭和二五年から曳山祭の山曳きは總當番が幹旋して雇っていたが、次第に人数が集まらなくなり、昭和三六年から彦根市の滋賀大学経済学部をアルバイトとして雇い始めた。平成四四年から五年間全山出場したときは、滋賀大学学生に加えて陸上自衛隊の今津駐屯地から支援隊が加わった。平成五年の長浜市制五〇周年記念の全山出場のときに初めてボランティアとして市内の各団体が参加した。

平成六年は、滋賀大学学生のアアルバイトが不足し、そのときの總



近世の長浜町と現在の山組の範囲

点線は近世の町境界、太線は現在の山組の境界線

當番だった諫鼓山と翁山が山曳きをした。翌七年は、阪神大震災のため自衛隊の応援が不足し、滋賀大学学生・暇番山・自衛隊・シルバー人材センター・連合滋賀などによって山曳きがされた。翌年、前年を踏まえて總當番がボランティアを募集した。南組（月宮殿・猩々丸・萬歳樓）の若い衆が応募し、出番山の月宮殿を曳いた。この関係が以後、三山連合となつて続いていく。平成一八年の新長浜市誕生記念・

平成一九年の長濱八幡宮別表神社昇格記念・平成二二年の長浜市広域合併記念で全山出場となり、暇番山の山曳きに一部ボランティアが参加した。このとき長浜バイオ大学生の参加が始まる。平成二三年、滋賀大学生のアルバイトがまとまらず、總當番は初めて広く市民にボランティアを公募した。事前に曳山祭や山曳きなどの説明会が開かれ、祭りでは山組の指導のもと山曳きがおこなわれた。この

年は、諫鼓山に市民ボランティアが加わり、翁山・鳳凰山の応援とともに山曳きをおこなった。長刀組の太刀渡りには初めて長浜バイオ大学生が幟持ちなどで参加した。また、三月に起きた東日本大震災で自衛隊が来られなくなったため、急遽暇番山の若い衆が春日山の山曳きをおこなった。

市民ボランティアの募集は、平成二四年の總當番にも引き継がれている。学生ボランティアは、長浜バイオ大学・滋賀文教短期大学・滋賀大学経済学部・滋賀県立大学に参加を呼びかけた。

一方で未経験者は不安だ、暇番山の若い衆が山曳きをしてはなど、ボランティアに消極的な意見も聞かれる。